

論文審査の結果の要旨

近代における日韓間の美術交流史研究は、ようやく近年盛んになってきた。その論点は、一方に、サイドのオリエンタリズム批判をふまえた、日本人画家による植民地朝鮮の他者化、そこにフランスの画家たちのオリエンタリズムの再生産を見る論点があり、他方に、朝鮮美術展という制度の中で、日朝の画家たちが、「朝鮮郷土色」というエキゾチシズムを、どのように作品化したのかという観点があった。本論文は、こうした従来の研究が、しばしばオリエンタリズム批判による二項対立的な図式的理解に陥りがちなことを指摘し、日本人画家の、あるいは日本近代洋画史の内発的な展開、その課題と創造性の問題として、作品と言説の緻密な分析によって、実証的に捉え直そうとするものである。

本論文は、第1章～第3章に序章と終章を加えた5部からなる。第1章では、藤島武二の《花籠》を取り上げ、従来、朝鮮の前近代的イメージを表象するものと解釈されてきたこの作品に対する批判的言説と実際の作品表現とのずれを、具体的な作品分析に基づいて明らかにし、オリエンタリズム論に基づく朝鮮表象理解の限界を示した。

この第1章に見られる問題意識に基づいて、続く第2章、そして第3章では、植民地朝鮮を描いた作品群を、改めて日本近代美術史の文脈に置き直して考察している。第2章では、比較的早い時期に朝鮮を訪問した2人の洋画家、湯浅一郎と藤島武二を取り上げ、その朝鮮に対する言説が、当時の日本の西洋画壇における二科会創立へ向けた動き（二科分立運動）と深く関わっていることを、朝鮮旅行前後の彼らの画風の変遷を分析して明らかにした。

第3章では、日本近代の壁画の展開を、朝鮮を停滞した古代と結びつける言説と関連づけて考察している。明治以降、陸続と誕生する西洋風建築の内部を飾った歴史的、神話的テーマの壁画制作を通して、ナショナル・アイデンティティが追求されたことを示し、さらに、この「日本」を積極的に表象する姿勢が、1910年朝鮮併合を経て、次第に東洋全体の融和的なイメージへと変化することを、壁画史の流れの中で明らかにし、その意味を論じている。ここでは朝鮮を画題とした作例のうち、藤島武二の未完成の装飾画と、和田三造が手掛けた朝鮮総督府壁画をとくに取り上げて、植民地朝鮮に日本の古代を投影する態度が、中国やインドの古代イメージをも取り込んで、日本を盟主とする汎東洋的な融和のイメージを形成するのに積極的な役割を果たしたことを、具体的に示した。

以上のように、本論文は、日韓近代美術史の、未解明の領域に踏み入った研究であり、韓国人研究者として、日本近代美術史における「朝鮮」問題を、単に批判的、図式的に捉えるのではなく、作品と言説の精緻で実証的な分析をもとに、その内発的な創造性の問題として考察した貴重な研究であり、今後の日韓近代美術研究に新たな可能性を拓くものである。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるのに十分な能力を持つことを認めるものである。